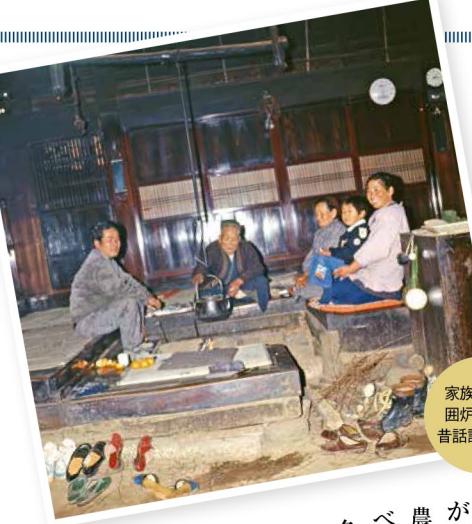


# 「冬の夜長は昔話で」

宇都宮伝統文化連絡協議会顧問 柏村 祐司



家族が集う  
囲炉裏端は  
昔話語りの場

小学一年生の国語の教科書をひも解くと、一月頃に昔話を授業を行う内容になつてゐる。この時期に昔話を取り上げるのは、もともと昔話の語りが、おもに冬に行われたことと無縁では無いようと思われる。考え過ぎであろうか。

昔話は「むかしむかし」という言葉で始まることに特徴がある。昔話は、「むかしむかしある所におじいさんとおばあさんがいました」等のよう

に、場所も時代も人物も特定されることはない。作者は不明であり、中には古事記にも出てくるような話もある。昔話には時代を超えて人々に喜びや感激、勇気等を与えてくれるものがある。そして何よりも昔話は、空想世界の物語であり、居ながらにして聞き手を異次元の世界へと誘いこんでくれる。そのうえ話の筋が単純明快である。そうしたことから長きに渡り多くの人々の間で愛され伝えられてきた。こうした昔話が盛んに語られた時が、農作業が一段落し夜な夜仕事も少なくなつた冬の晩だったのである。

人から人へと語り伝えられて來た昔話には、どれ一つとっても全く同じ言葉で語られるものはない。粗筋は同じであつても土地により語り部によつても多少異なる。例えば教

科書や絵本以前の「桃太郎」の話の場合、宇都宮あたりでは、川上から流れてくる桃は、悪い桃あるいは白い桃と良い桃あるいは赤い物との二つである。そしておばあさんが「悪い桃(白い桃)あつちへ行け、良い桃(赤い桃)こつちへ来い」と、悪い桃(白い桃)は泣く泣くあつちへ行き、良い桃(赤い桃)がやつてきた」という内容になつてゐる。「猿カ合戦」では、カニの助太刀をして猿を懲らしめるのに栗・蜂・白が登場するが一般的である。ところが宇都宮あたりでは、他に牛の糞が登場し、「蜂に刺された猿が慌てて家を出ようとすると牛の糞に滑つて転び、そこに白がドスンと飛び降りて猿を懲らしめる」という内容になつてゐる。

昔話の語りの場も土地によって異なる。一般的には圍炉裏端であるが、県東部の葉煙草栽培が盛んに行われた地域では、台所が昔話の語りの場ともなつた。晚秋台所で夜長、ゲーム機に代わって生

けまで行われる葉煙草のには、子どもも手伝わされたが子どもの眠気覚ましに昔話が語られたという。芳賀地方の一部では、庚申講の場が昔話の語りの場ともなつた。庚申講はご本尊の青面金剛を信仰するもので、一家の主が当番宿に集まり徹夜で行つたものである。当番宿では、夜遅くなつた頃に昔話が語られた。もちろん子ども向けの昔話ではなく、笑い話や艶話等大人向けの話である。大人たちの笑いを誘い、あるいは眠気を覺ますために語られたのである。

こうした昔話ではあつたが、昔話を殊の外熱望したのは子どもたちである。市内篠井辺りでは、昭和三十年頃まで昔話を語る古老がいたといふ。昔話の季節である冬の夕食後のひと時、囲炉裏端で昔話が語られた。昔話の本場の旧栗山村の語り部に比べれば、篠井の語り部のレパートリーは少ない。それでも夜になると「昔話を」と子どもたちはせがんだともいう。昔話は單に語る・聞くというだけではなく、年寄りと子どもたちを繋ぐものでもあった。冬の夜長、ゲーム機に代わって生の昔話も悪くない。